

No. 108

1994.

12.30

# 岐阜の博物館

〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111(代)  
振替 名古屋 6 37909

第19回

## 東海三県博物館協会 交流研修会開かる

平成6年10月4日(火)・5日(水)の両日にわたり、ぎふ長良川ハイツを中心に第19回東海三県博物館協会交流研修会が開催されました。

総会には今井春昭岐阜県教委文化課長と岐阜市長(代理)が来賓として出席され、ご挨拶を賜りました。

愛知県33名、三重県25名、岐阜県47名、総数105名が参加下さり、にぎやかに交流がなされました。

1日目は、開会式に引き続いて、記念講演とミュージアムフォーラムが行われました。



記念講演では、元東山植物園園長の坂梨一郎氏が「人づくり花づくり」の演題で講演されました。

その後、岐阜県博物館協会副会長の青木允夫氏を司会者として、岐阜市芸術文化協会の加藤宏安氏、東海女子短期大学講師の河合雅子氏、名和昆虫博物館長の名和秀雄氏、県国際交流員のナタリー・スペンス氏の4氏により「開かれた博物館づくりを考える」というテーマでミュー

ジウムフォーラムを開催しました。

夕方からの懇談会では、軽音楽を聞きながら、日ごろのそれぞれの博物館活動について意見を交流し、楽しい一時を過ごすことができました。

2日目は、4班に分かれ、岐阜公園内にある岐阜市歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館、名和昆虫博物館の3館と美術館三法荘の視察に出かけました。

岐阜市歴史博物館では信長ゆかりの品々を見ながら美濃地方の近世史に触れることができました。名和昆虫博物館では館長さんのお話を伺いながらギフトショウをはじめ、世界中のいろいろな昆虫を観察しました。また、加藤栄三・東一記念美術館と三法荘では、見ごたえのある絵画や美術品をこころゆくまで鑑賞しました。

この2日間の交流研修会で各館園の研究や実践の交流が活発に行われました。また、討論会では博物館でのボランティア活動の在り方はどうあったらよいかなど身近な問題についても意見が交わされました。この交流研修会はこれからの博物館活動の礎になると確信しました。



## 開かれた博物館づくりを考える

出演者 岐阜市芸術文化協会事務局長

加藤 宏安氏

東海女子短期大学講師

河合 雅子氏

名和昆虫博物館長

名和 秀雄氏

岐阜県国際交流員

ナタリー・スペンス氏

(司会)岐阜県博物館協会副会長

青木 允夫氏

生涯学習が叫ばれ、それを支援する社会教育施設としての博物館の役割が期待される時代になりました。そこで、今日のミュージアムフォーラムでは博物館界だけの意見交換ではなく、外部の皆さん方を講師としてお招きしました。博物館への不満、問題点あるいは博物館への要望などのお話を頂き、さらに会場の皆さんとの意見を交換し、今後の開かれた博物館への指針にいたしたいと思います。

そこで最初に講師の方々を紹介と共に、博物館に対する意見を頂きました。

まず、河合氏は、先般訪問した岐阜県博物館についての感想とともに、「子供や高齢者も楽しめるよう階段や休憩所に配慮し、直接的に分かりやすい楽しい展示が望ましいと思います。また、学芸員が長期間継続できるようにする体制が必要であることや、博物館スタッフや館長の役割が重要でし、ミュージアムショップの充実が



望ましいのでは」と提言しました。

次に加藤氏は豊富な海外体験で見聞した中国から西アジアの興味深い博物館や遺跡などの実例を紹介した上で、「博物館行事の情報をオンラインで提供し、行政レベルで住民にもっと情報を知らせてはどうか。また、長良川の全資料を集めるなど住民を巻き込んだ博物館があってもいいのでは。」といった意見を述べました。

オーストラリア出身のスペンス氏は「シドニーには元発電所を整備した実用的な技術の博物館があります。昔の生活を再現した部屋は一目で理解できます。参加でき、想像力をかきたてる博物館がいいと思います。博物館や美術館は普段の生活と違う立場から見学しながら、なおかつ実用的な日用品などをつくる過程を通して科学が理解できることがよい。」とのことでした。

名和氏は「博物館は人生を楽しくさせてくれるものです。主宰している自分がまず楽しめるものでなくては、見る者が面白いはずはないのです。また、研究という難しい言葉を使うのではなく、色々な実験を通じて、子供達がどんな反応をするか。拡大した映像や写真では実際の昆虫は理解できないのではないのでしょうか。そして文字の多いパネルは読みたくるものではないし、解説は見学する人それぞれの興味が違うので、一通りのものではダメだと思います。」などと提言しました。

そうした意見をふまえた上で、参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。

野原薫氏(岐阜県博物館):博物館ボランティアの活用について考えさせられる昨今ですが、博物館側だけでなく、参加者の方々にも得るものがある活動となり、参加したいという気持ちになるようにするにはどのようにしたらよいと思いますか。



ナタリー氏：自分の住む地域のことを認識し、親しみのある活動を行うことが大切かと思えます。

加藤氏：私はボランティアという表現はふさわしくないとします。まず、好きでやるのが大切なのです。

名和氏：私の所はそういう意味ではボランティアではないですね。幼稚園や小学生の頃から来ているような常連が、好きで自主的に手伝ってくれるといったところですね。

加納宏幸氏（岐阜市歴史博物館）：ボランティアについては大変難しいのですが、活動を通じて地域の皆さんが仲間づくりをしながら親んでもらえるのが大切かと思えます。博物館の事情によって異なるでしょうが、市民などその地域の方に親しんでいただけるというのが開かれた博物館として意味があるのではないかと思います。

中野イツ氏（三重県明和町立歴史民俗資料館）：当館では夏休みに年輩の友の会の方々が、子供達に対して昔のおもちゃの竹細工づくりや水中動物の観察などを手伝ってくれています。子供達と触れ合うのが楽しみになっているようです。

日比野光敏氏（岐阜市歴史博物館）：発言する方によってボランティアの意味が異なるようですが、無償で役に立つ人といった認識ではまずいと思います。今後は、参加される方々にとっても生涯学習の一つとしてのボランティアであり、博物館側としてはどんな方が来ても一緒にやっていきましょうという気持ちで対応しなければというのが最近のありかたになりつつあるように思います。

加藤氏：アメリカの場合、月給の1%は税金として文化活動を支援していこうという考え方が基盤にあります。

河合氏：アメリカの年金暮らしのご夫婦のお宅に行きますと、博物館や美術館などでボランティアとして表彰された表彰状が飾られています。それを誇りにしている人もいました。お金ではなく自分の持つ知識や情報で協力したことに対するの満足があるのではないのでしょうか。国や地域によって随分考え方が異なるように思います。吉田先生はアメリカに長くいらっしゃいましたのでお聞きしたいのですが、どのようにお考えになりますでしょうか。

吉田幸平氏（濃飛甲冑研究所）：ボランティアと博物館友の会はアメリカでは異なるものですので、切り離して考える必要があるかと思えます。そしてまずボランティアの起源はキリスト教の奉仕精神に由来するものであり、今話題になっているのはアメリカでは博物館友の会にあたります。日本では便理屋さんのように活動する人達のことをよくボランティアといいます。アメリカでは、自分の教会に献金するのと同じぐらい博物館に献金する人達がいます。そして活動においては曜日などローテーションを決めて活発に行っています。

その後吉田氏より質問があり、阿部氏よりミュージアムショップの在り方について、加藤氏より中央アジアにおける博物館の社会的な立場について、スペンス氏からは博物館でのネズミ捕り器の展示、名和氏からは友の会の活動や、解説パネルの文字のありかたについての討議が交わされました。

（内藤記念くすり博物館 野尻佳与子）



## 講演(要旨)

# 「人づくり花づくり」

元東山植物園長 坂梨一郎氏

講師の坂梨一郎氏は、名古屋市に就職以来、東山植物園長として退職されるまで30数年を、一貫して同園の運営に御尽力された。異動が常識の中にあつて、ひとつの職場のみで公務員生活を終わられた氏のお話は、終始、植物専門家としての顔と公務員としての顔が交錯したものとなった。

官公庁の職員は3~7年で異動となるが、植物園や博物館のように経験や専門性が重要視される職場にあつては、一般行政との違いが際立つ。一般行政職の異動が早いのは、一応の理由があるのであるが、植物園では農学部を卒業しても、専門によっては、すぐには一人前の仕事ができない。管理職としては公務員の常識と園の運営とのジレンマが常にあつたとされた。

温室の水掛係から始まった仕事は、ポストの変化とともに、その内容も除々に変わっていった。与えられた仕事を頑張る以外に道はないと断言される氏の言葉に、専門家としての自負が感じられた。園長を拝命し時の市長に「(氏自身が)植物を集める時代は終わった、これからは寄付を募り、ボランティアを育て、マスコミを大いに利用しろ…」と言われ、入園料を払ってでも行きたくなる植物園経営を目指された。

氏は同園はハードウェアは一定の水準に達したと判断され、ソフトウェアをいかに充実させるかに腐心された。そして「万葉の散歩道」の企画が浮上する。万葉集の中の植物が詠まれて

いる和歌を、市民に投票していただき、上位100位の植物を、散策道に植え、そこに歌札を掛けるというものだった。いわば植物と文学のコーディネートを目指したものといえる。市民に参加を呼び掛けたこの企画にマスコミはすぐにとびつき、はがき募集や散歩道造成、完成など折りにふれ、新聞紙上、テレビニュースを賑わした。市民にも好評で、多数の応募があり完成後の入園者数増につながったようである。

また、並行して「ふるさと植物散歩道」もつくられた。これは予算化が困難で、ある財団に援助をお願いすることになったのであるが、したたかな財団事務局との折衝は難行を極め、計画設計書の提出を何度も強いられ、管理職としての資金集めの御苦労を味わわれたようである。ふたつの企画は同園のソフト面での成功例であるが、こうした方向性は住民に親しみを持たれるための必須条件であり、職員の運営士気を高めるにも有効であったと言われた。

そして、植物園である以上学究的であらねばならないのは当然で、その上でソフト面をいかに導入していくかが肝要であり、そのバランスの中に施設の命運がある、と説かれ、欧米の著名な植物園は、いずれも植物研究と科学の発展に貢献するアカデミック性と、行き届いたサービス性に立脚していると具体例を示された。

坂梨氏は現在も、国際ナチュラルストカレッジの講師などを勤められ、植物の普及をとおして市民の方々と交流を持たれている。植物園時代やその後の経験から、スター性のある植物や「いわく植物」をただ見せるだけの時代は終わり、ミュージアムショップなどの関連施設の充実はもちろんのこと、そこに勤務する人間の質的向上を目指さねばならないと言われた。いかなる中身であっても、集客力の無い施設は良い植物園とは言えず、その集客力の有無は、深い専門性と植物を愛する人間性にあるとされた。「専門無き者は退化する」との発言の専門とは、学究性を含めたサービスという意味であろう。

(岐阜市歴史博物館 横田 宏)



# 高山の古墳と国分尼寺 —文化財でみる古代史—

とき 平成6年10月20日  
ところ 高山市風土記の丘学習センター  
講師 田中 彰氏



今回の公開講座は高山市教育委員会文化課文化財係長の田中彰氏にお願いしました。開催地高山市教育委員会のお骨おりで市民を主に59名の参加がありました。また、高山市所在の協会加盟館園の御協力により、12施設で無料見学をさせていただきました。

## ◎講演要旨

### 1. 高山の古墳時代

一番古い古墳は冬頭王塚古墳で、5世紀中頃とされてきたが、平成4年に赤保木5号古墳が発掘調査され、堅穴式石室であることが判明した。5号古墳の構造は冬頭王塚と似ていて、川原石を積んだものであり、両者の時期が近接している可能性がでてきた。また、5号古墳の川原石積石室の北側には、未盗掘の箱式石棺が確認され、しかも薄い板で作った石棺内部は赤色に塗彩されている。高山における古墳時代の始まりを知る上で、北側石室の調査は大いに期待できる。

また、国府町南垣内1～3号墳は3世紀末から4世紀初めの時期と推定されている。墳丘は削平されてしまったと考えられており、円形の周溝とその溝内に遺物が発見されている。

古墳時代も後期になると、過渡期の堅穴系横口式石室の小丸山古墳、巨石を使用した岩屋古墳、群集墳の上切寺尾古墳群、中切上野古墳群、ねずみ峠古墳群、よしま古墳群などがある。

終末になると、特筆すべき横穴が登場してく

る。三福寺町にある絵山横穴、七切横穴、杉ヶ洞横穴である。絵山からは50体近い人骨と7世紀初～7世紀終末の須恵器が出土している。横穴は岐阜県では珍しいが、富山、石川方面には多くあり、日本海側との関係が強いと考えている。

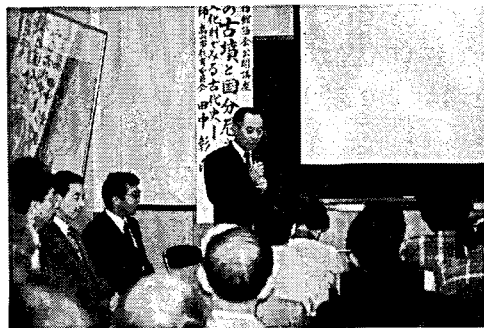
### 2. 高山の古代寺院

白鳳期が三仏寺廃寺、白鳳期の可能性のあるのが東光寺、四十九院である。三仏寺廃寺は川原寺式瓦当文様を使用し、また文様種類も10種と飛騨で一番多い。

奈良時代の寺院は国分寺、国分尼寺（辻ヶ森三社）である。国分寺は昭和27年の本堂解体修理時に発掘調査され、4×7間の建物が確認された。寸法は桁行26.13m（尼寺は26.224m、尺数は同じ）、梁間13.66m（尼寺は13.112m、尺数は国分寺の方が二尺程長い）であり、設計上の相似性が認められる。軒丸瓦は単弁8弁蓮華文で、赤保木古窯跡で焼かれたものである。

国分尼寺は昭和63年に発掘調査され、1m程の本格的版築基壇と4×7間の金堂建物跡が発掘された。尼寺の位置は国府町にあるか、高山市にあるかの論争に終止符が打たれた。また、同時に条里型地割も確認され、僧寺は二町四方、尼寺は一町四方と推定、両寺院の門前を横走る直線的東西道路も認められた。

国府、古川盆地の白鳳寺院建立と隆盛、高山盆地での天平寺院創建と、時代は盆地を移動して変遷の様相を見せる。 （田中 彰）



## 第29回 会員研修会報告

# 博物館連携促進事業「科学学習推進モデル事業」

第29回岐阜県博物館協会会員研修会を平成6年10月6・7日の両日にわたって岐阜県博物館を会場に開催した。今回の研修会は、国立科学博物館と岐阜県博物館の共催で実施された「博物館連携促進事業」への参加という形で行った。この事業のうち、地域に於ける科学学習を推進することを目的とした「科学学習推進モデル事業」の一環ということで、次のような内容で行った。参加者は、6日が34名、7日が29名であった。

### 第1日目

- 講義「国立科学博物館における昆虫標本の収集・管理と利用」
- 講師 国立科学博物館動物研究部昆虫第一研究室 篠原明彦氏

科博の昆虫標本は、約62万点（甲虫：17万点、チョウ・ガ：16.7万点、ハエ・アブ：13万点など）であるが、これでも諸外国と比べると十分とはいえない。これらの標本は、乾燥標本・液浸標本・プレパラートという形で保存している。なかでも、タイプ標本は極めて貴重なもので大切に保管をしている。

近年、分類学を研究テーマにする人が減少してきている。分類の研究は、とりまなおさず生物の多様性を研究することである。この生物の多様性を解明することは、環境保全を考えていく上で最も基本的で重要なことである。しかし、日本では、研究者の減少とも相まってあまり解明されていない。

- 講義「博物館の保存環境について」
- 講師 国立歴史民俗博物館 助教授

神庭信幸氏

保存は、大きく修復技術と保存環境に分けられる。このうち保存環境を中心に話をされた。その要因としては、温度・湿度・光・生物・大気汚染がある。これらの中でNO<sub>x</sub>は今後減少していくが、SO<sub>x</sub>は増加が懸念される。また

コンクリートからは、アンモニウムガスがでており保存に悪影響を及ぼしている。また、地震・火災・水害・暴力・盗難などにたいする危機管理も大切な留意事項である。

今後は、エキボン（臭化メチル）の代わりに無酸素状態にしたり、除虫菊（忌避剤）などを用いると有効である。今後の資料保存の在り方の参考になった。

- 事例研究・協議「実物を利用した学習指導の実践」



岐阜市科学館から、「科学教室～たたきぞめを中心に～」、内藤記念くすり博物館から「くすり博物館における体験学習について」、岐阜県博物館から「体を通して植物の特性を知る」の発表がそれぞれあった。今後の博物館における教育活動の参考になった。

### 第2日目

- 実習「化石のレプリカ作成」
- 講師 国立科学博物館 雨宮 宏氏  
岐阜県博物館 安藤・大塚両氏

博物館では、資料の収集・保管が大切な業務である。その資料の種類としては直接的なものとしては、実物および標本（実物がある目的で処理したもの）がある。間接的なものとしては、模造品・模写・映画・スライド・模型・図表などがある。模造品の中でも厳密な型どりによるものをレプリカという。色付けと重さがうまく調節できればかなり本物に近いものができる。実物の補完ができ、教育的効果が大きい。実物の保存のためにも有効である。

化石レプリカの作成は、型取り・樹脂流し込み・彩色という手順で、午後までかけて参加者全員熱心に取組み、出来栄も見事だった。

（研修委員 下畑 五夫）